

空も飛べそうな美しい「羽」

長く大きな胸びれがトレードマークのセミホウボウ科の魚。英名を Flying gurnard (空飛ぶホウボウ) といいます。初めて見た方もいるでしょうね。食材としては知名度の低い魚です。世界に二属七種、日本からはそのうち四種が知られています。さて、ホシセミホウボウの少々ずんぐりとした体から長く伸びた美しい胸びれをご覧ください。まるでセミの体から伸びた羽のように見えませんか？そこには「星」がちらばめられたような斑点模様で丁寧に描かれています。一方、しなやかなひれとは対照的に、頭部は骨質板で、体は硬いところで、全身がっちりとして覆われています。外見が似ているためにホウボウの仲間だと思われがちですが、ホウボウ科とは内部骨格にかなりの相違があり、遺伝的に遠いグループであることが分かっています。

セミホウボウ科を表す Dactylopteridae は、ギリシア語の daktylos (指) と、 pterygion (ひれ) から「指のあるひれ」を意味します。大きな胸びれは空を飛ぶためにあるのではなく、体の輪郭をぼかし、体を大きく見せるのに効果的。歌手ジュディ・オングさんの「魅せられて」の衣装のように、胸びれを大きく開いた状態で海底近くをゆっくり泳ぎながら、時に

胸びれ前方の先端部分を手のように使い、砂の中にある餌を探します。大きな胸びれに隠れて上からは見えませんが、内側をのぞいてみると、腹びれを交互に使い、海底を歩くように移動している姿があらわに。何ともユーモラスです。

魚図が複数描かれたわけとは？

グラバー図譜には珍しく、ホシセミホウボウ魚図は三枚あります。当時、図譜を編さんした倉場富三郎が魚図に書き込んだ種名はそれぞれ、セミホウボウ、オキセミホウボウ、ホシセミホウボウでした。つまり、すべて別種だと考えたのでしょう。しかし、あらためて魚図に描かれた形態に基づき検討してみると、後頭部に長く伸びた遊離棘と背びれの間に短い遊離棘がないことなどから、三図ともホシセミホウボウと同定できます。富三郎は文献と標本を詳しく調べた上で種名を決定しましたが、たとえ専門家であっても魚の種類を同定するのは難しいことなのです。

二人の画家が描いた魚図

ホシセミホウボウで興味深いのは、すべての構図が極めてよく似ていること。ホシセミホウボウ独特の胸び

江戸時代に川原慶賀が描いた魚図

グラバー図譜の時代からさらに百年近く、一八〇〇年代にさかのぼりましょう。江戸時代、シーボルトらの依頼で出島オランダ商館の絵師を務めた川原慶賀は、当時ヨーロッパで確立された分類学に基づく学術絵図の描き方を直接学びました。

その川原慶賀の描いたホシセミホウボウの図とも、小田紫星の魚図は似ているようです。つまり、小田は川原の図を参考にしたのではないかと推測します。中村と同じく小田もまた、独特な形のホシセミホウボウを前に、どう描こうかと思いついたに違いありません。しかし小田は、川原の絵図とは魚体の角度を少し変えて描いたことで、本種の分類形質の一つとなる背びれの前の遊離棘がないことまではっきり確認できる魚図に仕上げられています。

画家たちに焦点を当てれば、また新たな魅力が見えてきます。グラバー図譜に興味は尽きません。



解説 山口敦子
長崎大学水産・環境科学総合研究科教授

YAMAGUCHI Atsuko
東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。2000年から長崎大学。専門はエイやサメなど魚類学と水産資源学の研究。主な著書に「干潟の海に生きる魚たちー有明海の豊かさ」と「危機」(東海大学出版)など。

長崎大学附属図書館のホームページでもご覧いただけます。
<http://oldphoto.lib.nagasaki-u.ac.jp/GloverAtlas/>

「グラバー図譜」は、長崎の実業家であった倉場富三郎氏が編纂したコレクションです。日本四大魚譜の一つといわれています。

グラバー図譜
日本西部及び南部魚類図譜
Fishes of Southern & Western Japan

Glover Atlas ホシセミホウボウ

Daicocus peterseni
画家 中村三郎画(左) / 小田紫星画(右)